

は達成できると自信を深めた。

とくにたいせつなことは分けつ期で、分けつしてから十五日間は家を留守にするような外出はききたい。

佐藤 吉雄さん（十文字町・四十年日本一・四十二歳）

私はまず、稲づくりは人づくりからスタートしなければならぬと思っています。だから農業は脳業、考える百姓を目標としている。私たちのグループは、やる気のあるものだけが集まって活動を行なっている。

昨年の作柄は、少数の特例をのぞけば十割当り六俵以上の収穫をあげている。これはグループでの研究が成果をあげたためだとみている。

これからも、県、農協、農民が一体となって品種の改良、技術の向上につとめたならば、増産はかならずしもむづかしいことではない。

気象に応じた栽培管理

以上の発表に次いで、学識経験者として出席した加藤正一さん（農業コンサルタント・稲川町）は、

県南の山間地域の技術指導者として長い間担当したが、稲作の三種の神器と、五つの鉄則を持っている。

①水の温度を高める②施肥に注意してじょうぶな稲をつくる③病害虫の防除を徹底的に行う——ことである。

また東北の山間部はいつも冷害があるという心がまえが必要であり、寒冷地で安定した良質の米をとるためには①早熟耐冷多収品種を選ぶ②健康な苗

を適期に早植えする③冷害のことを考

えて出穂期を早める④窒素肥料の元こ

えは、過去五年間の平均二割びきとし、あとの二割は穂の出る前後（十日間）に育ちぐあいを見て追肥する⑤気象の条件に応じて栽培管理をじゅうぶ

に行なう。

米づくり日本一の実績、作況指数からみても、いまや秋田の稲づくりは佐賀県とトップをきそっている。

わたしが指導している皆瀬村若畑は標高三百五十坪の冷害地帯にありながら三早栽培、施肥、水管理の合理化によって昨年など最高の収量をあげている。これからみても、凶作は招くもの豊作は作るもの、と

思っている。

秋田市を中心に南秋、河辺地区を担当して農業の指導にあたってきた進藤政太郎さん（秋田市・七十歳）は、

このごろ農家は冷害、不ねんに神経質になりすぎている。過去二年の体験を生かしてヨネシロなどの耐冷品種を中心にやれ

ばそれほど心配ない。

▽冷害克服の技術はすでに確立されているから、農家がそれを守るかどうか

▽地力だけを重視する考え方は改める（暗きよ、客土の強調は農民に重圧）

適地適産を確立

由利・金浦
農業協同組合

▽集団栽培には、水利の連帯、共同研究を活発に▽四石どりの技術は確立しているのになぜ収穫できないか。といった点の解明がこれからの課題となる。

冷害型といわれた昨年の稲作の中から農業団体の最高の栄誉である「朝日農業賞」と多収穫「米作日本一」が秋田県か

ら生まれた。昭和四十一年度「朝日農業賞」の授賞集団は由利郡金浦町農業協同組合（組合長佐々木重雄・農家戸数四百二十八戸）である。

町の耕地は水田四百六十畝、畑七十四畝、山林五百畝、草地六百畝と、入り組んだ地形が、烏海山ろくど海にはさまれてひらけている。

四十一年の生産額は米二億五千八百万円、そ菜二千五百万円、豚二千万円、卵千三百万円のはか牛乳四百万円、肥育牛三百万円、種もみ四百七十万円と合せて三億三千余万円を生産し、農協指導部が中心となって支部、婦人部、青年部の合議で、六つの全部落が特色を生かした「米プラスアルファ生産」の効果をあげている。

昭和二十三年、組合の発足とともに組合長をつとめてきた佐々木重雄（美）さんは「農業は組合員の利用がなければなり立ちません。そのため生産に重点を置いた経営をしてきました。農業にはすべてのアイデアをつぎ込んだといえまじょう。適地適産を思い立ったのは米の統制徹底といった気運の高まった三十年頃からです。組合の運営には部落指導者、婦人部、青年部、それに職員の意見



45年まで2千集団の「集団栽培」がすすめられる（五石どりの審査）